

日本語の「科学」と 英語の“science”



松尾義之

日本の科学・技術は超一流である。今年も日本人2名が受賞したが、21世紀に入ってほぼ毎年ノーベル賞受賞者を誕生させ、また、画期的な発明や技術の大半を日本から生み出している。注目すべきは、これを日本語で成し遂げているところだ。文献を読み、論文を書く時は英語も使うが、最も大切な理解や思考・創造は、あくまでも日本語(=母語)によってなされている。

英国人や米国人は英語で science をしているし、ドイツ人はドイツ語で Wissenschaft をしている。しかし、欧州であっても母語で科学の高等教育ができる国は多くない。アジア・アフリカ圏では、ほとんどが英語やフランス語だ。日本は特殊なのである。

では、なぜ日本人は英語でなく日本語で科学ができるのか。それは、科学をするための専門用語、知識、論理など、すべての道具がそろっているからである。でも、自然にそうなったわけではない。江戸時代の蘭学から始まり、特に幕末明治の時代に、西周を代表格とする先人たちが、西欧近代文明を構成する用語や知識を、必死で日本語漢語に翻訳してくれたからである。科学や技術に限らない。教育、文化、法律、政治、経済にいたるまで、それまでの日本語に存在しなかった概念や用語を大量に翻訳・創造したのである。

科学という言葉をはじめ、実は、日本語と中国語では共通の専門用語が多い。日清戦争後に来日した中国人留学生(作家・魯迅など)が持ち帰ったからだが、うれしいことに、私の講義を聴講した中国人留学生は、この歴史的事実をきちんと知っていた。

ところで、英語による“science”と日本語による「科学」は同じものなのか。科学ジャーナリズムの中でも、特に日本語と英語の橋渡し分野で仕事をしてきた私が持ち続けてきた疑問である。もちろん、得られ

る普遍的真理に違いがあるわけではないが、そこへと向かう発想や筋道がかなり違う、と感じる。

『日本語の科学が世界を変える』(筑摩書房)にも書いたが、日本人は元来、右と左の極端な意見があるとき、その中間にこそ真実があるという見方をする。中庸とか中道という観点である。この「真ん中にこそ真実がある」という世界観は、湯川秀樹博士の「中間子論」や木村資生博士の「分子進化の中立説」を導いたと思う。中立説は、自然淘汰に有利でも不利でもない遺伝子が存在することを証明し、欧米人を驚かせた。

西欧文化の判断様式は、基本的に、イエスカノーカ、正しいか間違いかという二律背反だ。しかも聖書の影響が強い。ES細胞やiPS細胞のように、科学が聖書とぶつかる場面もしばしば出てくる。こうした縛りに無縁の日本人科学者は、明らかに自由な発想を持つことができる。日本語で科学する優位性だ。

日本人は物に対する独自の感覚を持っている。物と性質は一体不可分という世界観だ。物性論という分野があるが、この物性という言葉は日本語だけにしかなく、外国語に翻訳できない。青色LEDや超伝導などを含む日本が非常に得意な研究領域で、職人文化や技術好きともつながっている。日本の大学教授が自分で実験するのは珍しくないが、欧米なら補助職員に任せる仕事だ。

グローバル化だから英語というのは単純すぎる。科学者の共通語がブローケン英語である理由は、個別文化に基づく発想や思考を尊重しているからだ。科学技術分野では、むしろ日本語というローカルな言葉と思考法が、創造性や強い発信力を生んでいる。

(まつお よしゆき・科学ジャーナリスト)